

E-16 家庭科の教科構造から見た家庭科学習指導要領・指導書についての疑義

群馬大教育 常見 育男

明治・大正から昭和20年までの80年間は、家庭科の全盛期であったが、昭和20年から現在にいたる期間は家庭科衰退期の観がある。この証左は家庭科に対する常識的立場からの多くの批判のほか、学問上の教科論の立場からその廃止を正当とする論説すら現われている現状がよく示している。これらの批判や論説は一言にしていえば家庭科の教育的価値に対する不信であるから、家庭科が女子のための特殊的教科であるとして、これが「必修」や「授業時数の増加」を主張し・貫徹しただけでは解決できない。そこにはなお未解決のままの根本問題が潜在し・放置されているものと見てよい。大切なことは「家庭科の本質」や「家庭科のもつ教育的使命」について、改めてこれが理論的究明の努力を傾倒することであろう。

家庭科の理解とその実地指導については文部省の「家庭科学習指導要領」と「家庭科学習指導書」とが指示している。家庭科教育を前進させる道は、この「指導要領」と「指導書」を手懸りとして、その意味・内容を探索・吟味することであろう。家庭科に対する不信のうち最も深刻なのは「高校家庭科」である。高校家庭科の科目に「家庭一般」がある。「家庭一般」は「家庭科の基礎」であり、「家庭経営の立場から家庭生活全領域にわたり総合的に習得させるべきこと」が掲示されている。しからば内容の8項目の関連性と構造化をどのように考え、家庭経営の立場を具体的にどのようにとらえたなら家庭一般の所期の目標を達成できるであろうか。